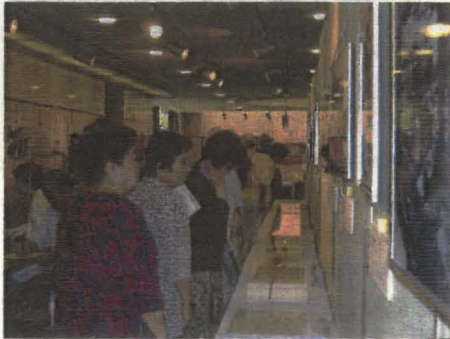


☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第43号 2006年2月17日(金)

発行:歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)



▲神戸空襲パネル展の様子
(2005年8月18日撮影)



▲2005年度史料ネットシンポの様様
(2005年6月18日撮影)

目次

◆◇総会・シンポジウム特集◇◆

2005年度歴史資料ネットワーク総会及び
シンポジウム「風水害から歴史資料を守る」

総会の記録 吉村真樹子……2

参考資料……3

シンポジウムの記録 松下正和……18

第7回「火垂るの墓を歩く会」実施報告

近藤浩二……26

「神戸空襲を記録する会」活動報告

近藤浩二……28

活動日誌……30

◆◇総会・シンポジウム特集◇◆

2005 年度歴史資料ネットワーク総会及び
シンポジウム「風水害から歴史資料を守る」

【総会の記録】

- ・日時 2005 年 6 月 18 日（土）午前 10 時～12 時
- ・場所 尼崎市立小田公民館 1 階ホール（尼崎市潮江 1-11-1-101）

2005 年度歴史資料ネットワーク総会は、藤田明良歴史資料ネットワーク副代表の挨拶の後、北泊謙太郎氏を議長に選出、総会定足数の確認を行った後、議案審議及び質疑が行われ、2004 年度活動報告・決算報告・監査報告、及び 2005 年度活動方針案・予算案のいずれの議案も承認された。

質疑は、2004 年度活動の中心となった台風 23 号被災資料レスキュー活動に集中した。まず、活動を人力的に支えるボランティア募集の方法等についての質問があった。これについて、ボランティア登録は各学会を通じて行っていたこと、阪神・淡路大震災時のレスキューと比して大学の研究室を通じて学生をボランティアとして募ることに対しての働きかけが弱かった点を踏まえ、今後そういった活動を強化する方向であるということが述べられた。また、被災資料整理を如何に展開していくのかに関して、今回の整理では大学等の研究機関に搬送して資料保全を行うだけではなく、個々の資料をレスキューした地域で保管し、修復作業を行うという新たな試みを行ったことが報告され、今後、史料ネットが行う資料レスキューの一つのモデルとして検討していきたいとした。

一方、指定管理者制度導入が取り沙汰される芦屋市立美術館（以下、芦美）問題についても、現在の状況についての質問があった。これに関しては①2005 年秋の市議会において結論が出る、②美術部門が NPO 法人設立に向けて活動している一方、③博物館部門は市が委託条件を明確にしない以上、所蔵史料保全ができるか不透明として NPO 化に懐疑的である旨が報告されたが、市側のプランも不明確であり、情報の提供を呼びかけた。

2004 年度会計決算報告については、学会会員の会費についての史料ネットの見解の確認がなされた。学会会員には毎年各学会の財政規模の 2000 分の 1 のカンパ協力を求めていること、財政規模の小さい学会などは当初から会費納入を求めていること、そういった学会からは会費ではなく委員として人員を派遣する形態での協力がなされている旨の返答があった。また、学会の会計年度の違いから本報告には反映されていないものの、実際は納入されている点などの補足説明がなされた。

2005 年度予算案については緊急対応基金のあり方について議論がなされた。台風 23 号被災資料保全作業が継続する見通しの現在においては「基金」内に支出が予算として計上されるのは致し方ない面もあるが、大規模災害が頻発している現状で、本来の積立金としての側面が維持されるのかという懸念が表明された。これに対して、支出の内訳は例年は提示していないが、今年度は確定している金額があるので費目として計上した旨の説明があった。また、災害カン



パ金を一般会計から繰り入れており、こういったカンパ金を今後の防災にも活用し、繰り越していく意図があることも述べられた。また、他機関からの旅費助成等も受けており、実際は予算・決算より100万円程度多額に使用していることも付け加えられた。

また、専従事務局員人件費について、専従事務局員の雇用が現実的に可能であるのか、現実的でない場合、事務局員の負担を軽減する意味で予算を振り分けることができないかといった意見が出された。

最後に2005年度運営委員の選出が行われた。今年度は神戸女子大学史学会からの委員は欠員となり、当面6学会7名の委員の他に、個人委員2名、事務局員4名によって運営されることとなった。会計監査2名も選出し、総会は終了した。(以上、文責 吉村真樹子)

[参考資料1] 2004年度活動報告

1. 被災資料の整理や被災地での調査活動

事務局保管の被災資料整理は、院生・学生・市民などのボランティアによって進められた。神戸大学では計7回の整理が実施され、のべ68人が参加し、約10箱分が終了した。7回のうち、阪神・淡路大震災での被災資料整理には半分の三回しかあてることができなかったが、台風23

号による被災資料の整理を行うことで、新たに水損史料修復や襖解体・下張り文書救出のノウハウを蓄積することができた。他にも新聞資料の整理を行った。

神戸女子大学での被災資料整理(S家文書)は、4箱分の整理が終了し、神戸大への移管が終了した。残りの整理は神戸大学に場所を移して進行中である。

第21回：2004年6月12日	参加者12名(Y家文書整理)
第22回：2004年7月10日	参加者9名(Y家文書整理)
第23回：2004年9月11日	参加者6名(Y家文書整理)
第24回：2004年11月13日	参加者22名(日高町T家乾燥)
第25回：2005年2月12日	参加者7名(日高町T家襖解体)
第26回：2005年4月17日	参加者6名(日高町T家襖解体)
第27回：2005年6月11日	参加者6名(日高町T家襖解体)

神戸市文書館との共同事業である神戸市緊急地域雇用促進特別交付金事業「市民から引き継いだ古文書整理等」事業では、S家文書が約23,000点整理され、その内容が文書館のHPに反映されるなど具体的な活用も行われた。また、さらに、神戸大学文学部地域連携センターと神戸市文書館と史料ネットの三者共同で、神戸地域における財産区調査が行われ、灘区・東灘区・西区で調査を進めた。

さらには、震災時にレスキューした史料所蔵者から新たに史料寄託の依頼をうけ、複数の機関を斡旋し、寄贈手続きの仲介を行った。震災時に預かった被災資料の返却・寄贈も進めることができた。

2. 市民や自治体との連携を重視した地域史研究や地域遺産保存・活用の取り組み

連続する風水害による被災資料調査と修復活動に全力を注いだため、今年度は、例年のように年4回の歴史講座を開催することができなかった。そこで、今年度は史料ネットと協力関係にある団体と企画を共催することで、各団体や地域住民と交流をはかった。

自治体関連については、芦屋市立美術館のNPO化に関する情報を収集し、検討を行った。また昨年度史料ネットが主催した、楠・荒田町遺跡の学術的価値を検討する緊急シンポジウム「平家と福原京の時代」をもとに、歴史資料ネットワーク編『平家と福原京の時代』（岩田書院）を発行することができた。

さらに、下記の催しに協力を行った。

「シリーズ 歴史遺産を考える」

◎第1回 近世市民講座「芦屋の歴史をたどる～尼崎藩と難目の村々～」

2004年9月5日（日）13:00～17:00 @芦屋市民センター 参加約110名
報告：岩城卓二氏（大阪教育大学）「幕藩体制における尼崎藩の役割」・明尾圭造氏（芦屋市立美術館）「三条村の水利事情」・「古地図と用水」（展示解説担当＝加藤宏文・河野未央・吉村真樹子）、後援：芦屋市教育委員会・芦屋市立美術館・神戸大学文学部地域連携センター・兵庫県教育委員会

「シリーズ 歴史遺産を考える」以外の主催◎、共催○、後援●、参加△ 企画

○大阪歴史科学協議会 5月例会

2005年5月21日（土）13:30～17:00 @東淀川勤労者センター 参加27名

○芦屋市立美術館シンポジウム

2005年5月30日（月）14:00～16:30 @芦屋市立美術館ホール 参加約170名

主催：芦屋川ロータリークラブ、共催：三条津知財産区三条会、芦屋市婦人会、芦屋ユネスコ協会

報告：奥村弘「地域の歴史遺産の活用と博物館の役割」（仮）他

●「淡河町の歴史と文化を考える」講演会

2004年7月11日&2005年2月5日 主催：淡河町自治協議会

●第6回「火垂るの墓を歩く会」

2004年8月4日&7日、主催：「火垂るの墓を歩く会」実行委員会 参加 4日40名、7日50人

●史学研究所公開講座「兵庫津研究の最前線」

2004年12月18日（土）13:30～16:00 @神戸市立博物館 参加約100名

報告：大国正美「みなと・兵庫津の歴史像をもとめて」他、主催：大手前大学史学研究所オーブンリサーチセンター・神戸市立博物館

●大阪歴史学会見学検討会「天下普請を支えた石材の調達——東六甲徳川大坂城石切丁場跡——」

2005年4月16日（土）10:00～17:30 @芦屋市市民センター 参加 午前78名・午後約100名

●日本西洋史学会第55回大会特別企画「神戸歴史舞台——西洋社会との出会い、震災と史料保存、そして未来——」

2005年5月15日（日）13:00～17:00 @神戸大学文学部 参加50名

シンポジウム報告：奥村弘「地域歴史遺産の保全と海港都市神戸」他

△被災者支援復興会議Ⅲフォーラム

2004年9月25日（土）@芦屋市民会館 参加約100名

報告：奥村弘「災害を記憶する文化とは——歴史資料ネットワークの活動から——」他

△日本福祉大学知多半島総合研究所シンポジウム

2004年10月30日（土）参加約200名

報告：奥村弘「大規模自然災害と地域歴史遺産保全——歴史資料ネットワーク10年の歩みから

——」

△文化財保存修復学会例会「文化財防災の教訓と展望 ——阪神・淡路大震災から10年——」

2005年1月22日(土) 13:00～16:15 @尼崎市立立花公民館 参加約30名

報告：河野未央「歴史資料ネットワークの取り組み」他、主催：文化財保存修復学会

△第3回歴史文化をめぐる地域連携協議会「市町合併と地域遺産の保存・活用を考える——公文書・文化財・地域史料——」

2005年1月30日(日) 13:00～17:00 @姫路市立城郭研究室大会議室

報告：松下正和「被災地域の自治体・郷土史団体との連携による地域遺産保全活動～台風23号による被災歴史資料・文化財の救済・修復活動を通じて」他、主催：神戸大学文学部地域連携センター

3. 震災記録保存と地域資料保存

2004年6月6日の総会に合わせてシンポジウム「現代社会における歴史学、史料・文化財保存～震災から10年、史料ネットの活動をめぐって」を開催した。

9月23日に人と防災未来センターで行われた「第3回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」に参加した。

さらに今年度も「シンポジウム地域資料の保存と活用を考える」実行委員会に協力し、2005年3月19日に行われた第2回シンポジウムを朝日新聞大阪本社・大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・(財)公害地域再生センター(あおぞら財団)・NPO西山卯三記念すまい・まちづくり文庫と共催した。

◎シンポジウム「現代社会における歴史学、史料・文化財保存～震災から10年、史料ネットの活動をめぐって」

2004年6月6日(日) @尼崎市立小田公民館 参加28名

報告：奥村弘「震災後10年間に新たに展開してきた状況や課題について」・辻川敦「この間の行政の動向について」、コメント：保立道久氏(東京大学史料編纂所)

○第3回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会「災害の記録継承システムの構築を考える」

2004年9月23日(木) @人と防災未来センター 参加43名

○第2回シンポジウム地域資料の保存と活用を考える「地域資料保存・活用ネットワークの構築に向けて」

2005年3月19日(土) 13:00～17:00 @桃山学院高等学校 参加50名

報告：佐賀朝「地域資料保存・活用ネットワーク構築のための第一歩——大阪の特長を活かして」他

4. 災害対策

2004年7月に発生した「新潟・福島豪雨」「福井豪雨」、夏以降の連続台風への対策のために、災害発生直後より情報収集にあたりとともに、被災地の文化財関係機関・報道機関・ボランティアセンターに対して被災資料の現状確認・保全依頼のFAXを行った。このように、今年度から地震だけではなく、風水害に対しても本格的に対応できる体制づくりを行ってきた。

特に福井水害に対して、史料ネットが7月25日に福井入りし、現地と対応の協議を行った結果、地元の文化財担当者を中心に福井史料ネットワークが結成された(代表＝松浦義則氏@福井大)。その後、今立町・池田町・美山町・福井市・鯖江市を中心に11回にわたる被災史料現

状確認調査が行われた。史料ネットでは、これらの調査活動に参加するとともに、メーリングリストの立ち上げ、募金の呼びかけなど現地と連絡を密に取り合いながら、その活動を支援した。カンパ総額は406,133円が集まり（4月30日現在）、史料ネット側の必要経費を除いた額を福井史料ネットワークに寄付した。

夏以降の連続台風に対しても情報収集と被災資料調査依頼のFAXを被災自治体等に送付した。とりわけ、台風23号の被害は大きく、かつ被災地が史料ネット事務局の近隣であったことから、阪神・淡路大震災以降で初の直接的な保全対応にあたった。10月28日以降は兵庫県内において、12月1日以降は京都府内において被災史料調査を行った。その結果、日高町の旧家2軒から近世・近代文書や書籍類、出石町から自治会文書、京丹後市から大量の水損襖、舞鶴市から区有文書2件・水損書籍1件をレスキューすることができた。学生・院生・市民・自治体職員など200名を越えるボランティアにより手作業による乾燥作業が進められ、日高町の水損史料の半分以上を乾燥させることができた。未処理の水損史料については、兵庫県教育委員会・滋賀県教育委員会の協力を得て、兵庫県埋蔵文化財調査事務所・神戸市埋蔵文化財センター・安土城考古博物館の真空凍結乾燥機により乾燥中である。なお、真空凍結乾燥前の予備冷凍にあたって、(株)西宮冷蔵による冷凍保管倉庫の無償提供を受けた。

今回の被災資料保全活動は、大学や学会、被災自治体の文化財担当職員、郷土史団体会員や地元区長・文化財審議委員、企業などの広範な協力を得て、大きな成果を収めることができた。

連続台風以降、災害カンパと名称をかえて募金をお願いし、4月30日段階で410,864円が集まっている。

なお、大規模地震に対しては、おおむね震度5以上の地域を中心に、被災状況の確認依頼のFAXを文化財担当部局に送付した。とりわけ2004年10月に発生した新潟県中越地震では、地元で新潟歴史資料救済ネットワークが結成され、史料ネットは募金活動の支援を行った。また2005年3月に発生した福岡県西方沖地震に対しては、県や市の教委に連絡をとるなどして情報収集につとめた。

また、内閣府の「災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会」へ史料ネットを代表し、奥村弘が参加した。その結果、2004年7月に内閣府により公表された答申「地震災害から文化遺産と地域をまもる対策のあり方」は、未指定の文化財を含んだ文化遺産全体をまもるための方策も含まれるものとなった。

さらには、
国連防災会
議のパブリ
ックフォー

△国連防災会議パブリックフォーラム「文化遺産を災害からまもるために」 分科会3「文化遺産の自然災害史と被災した文化遺産の修復」 2005年1月20日（木）14:15～15:15 @神戸国際会議場 参加約200名 奥村弘「動産文化財の防災対策と救出・修復」他

ラム「文化遺産を災害からまもるために」に史料ネットも参加した。2005年1月20日に行われた分科会「文化遺産の自然災害史と被災した文化遺産の修復」で報告を行った。

5. 組織と運営

今年度の事務局は、5名の事務局員にて業務を行った。運営委員会は第22回（7月20日）から第32回（6月9日）までの計11回を開催した。

2004年度 運営委員・事務局一覧

<運営委員会>

石黒志保（神戸女子大学史学研究会）・石田真貴美（大阪歴史科学協議会）・大国正美（神戸史学会）・加藤宏文（個人会員からの選出）・佐賀朝（大阪歴史科学協議会）・添田仁（日本史研究会）・高松雪枝（神戸女子大学史学研究会）・吉川潤（大阪歴史科学協議会）・吉村真樹子（大阪歴史学会）

<事務局>

奥村弘（代表、神戸大学史学研究会）・藤田明良（副代表）・松下正和（事務局長、京都民科歴史部会）・人見佐知子（事務局員）・河野未央（事務局員）・堀田昌宏（事務局員）・浅利文子（事務局員）・板垣貴志（事務局員）

ホームページの整備をすすめ、各方面への情報発信の充実をはかった。ニュースレターは5回（2004年8月9日福井水害緊急特別号、2004年9月3日第38号、2004年10月22日第39号、2005年3月28日第40号、2005年5月19日第41号）発行した。メールニュースは43回を発信し、現在356名が登録されている。

この1年間の書籍販売実績は、計227,670円（『神戸と平家』71冊、シンポ記録集38冊、総括集16冊）の売り上げであった。4月30日段階の会員数は学会会員8団体、個人会員140名（昨年比+14）、学生・院生会員23名（+3）、サポーター51名（+6）、ニュースレター購読86名（+11）の308名（+34）であった。

また、各学会の会誌上や例会などにおいて、史料ネットの活動紹介やカンパ呼びかけの協力を賜った。詳細は下記の通りである。

	22年度	23年度	24年度
個人	99	126	140
学生・院生	18	20	23
サポーター	29	45	51
ニュースレター	64	75	86
学会	8	8	8
退会	0	2	3
合計	208	271	308

<各学会会員の協力>

- ・「自然災害による被災歴史遺産保全活動への支援募金のお願い」（『日本史研究』510号、2005年2月）
- ・加藤宏文「歴史資料ネットワークと水害被災歴史資料保全活動」（『ヒストリア』194号、2005年3月）
- ・「自然災害による被災歴史遺産保全活動への支援募金のお願い」（同上）
- ・松下正和「歴史資料ネットワークによる被災史料救出活動について—台風23号への対応を中心に—」（『日本史研究』513号、2005年5月）
- ・歴史資料ネットワークシンポジウム『風水害から歴史資料を守る』の告知（『歴史と神戸』250号、2005年6月）

[参考資料 2] 2004年度決算報告 (自 2004年5月1日 至 2005年4月30日)

◎2004 年度予算

収入の部	
前年度繰越金	¥1, 203, 811
会費収入	¥1, 000, 000
○学会会員	¥40, 000
○個人会員 (一般)	¥650, 000
○個人会員 (学生)	¥100, 000
○サポーター	¥150, 000
○ニュースレター	¥60, 000
寄付金	¥50, 000
市民講座資料代	¥100, 000
市民講座懇親会参加費	¥100, 000
書籍・記録集・総括集売上	¥200, 000
雑収入	¥5, 000
合計	¥2, 658, 811

◎2004 年度一般会計収支計算

収入の部	
前年度繰越金	¥1, 203, 811
会費収入	¥688, 500
○学会会員	¥23, 500
○個人会員 (一般)	¥470, 000
○個人会員 (学生)	¥25, 000
○サポーター	¥123, 000
○ニュースレター	¥47, 000
寄付金	¥26, 000
市民講座資料代	¥88, 000
市民講座懇親会参加費	¥0
書籍・記録集・総括集売上	¥227, 670
雑収入	¥10, 001
宮城カンパ収入	¥5, 000
福井カンパ収入	¥406, 133
災害カンパ収入	¥410, 864
合計	¥3, 065, 979

支出の部		支出の部	
専従事務局員人件費	¥1, 000, 000	専従事務局員人件費	¥0
事務局行動費	¥180, 000	事務局行動費	¥195, 000
事務局臨時経費	¥120, 000	事務局臨時経費	¥55, 833
総会諸経費	¥40, 000	総会諸経費	¥30, 520
市民講座諸経費	¥140, 000	市民講座諸経費	¥67, 777
その他企画諸経費	¥100, 000	その他企画諸経費	¥69, 830
史料整理交通費	¥120, 000	史料整理交通費	¥28, 237
ニュースレター印刷代	¥30, 000	ニュースレター印刷代	¥70, 372
ニュースレター郵送代	¥180, 000	ニュースレター郵送代	¥105, 640
総括集印刷代	¥40, 000	総括集印刷代	¥30, 340
図書雑誌購入費	¥100, 000	図書雑誌購入費	¥180, 291
備品消耗品代	¥100, 000	備品消耗品代	¥106, 943
予備費	¥508, 811	宮城カンパ支出	¥5, 000
		福井カンパ支出	¥401, 133
		災害カンパ支出	¥100, 000
		○新潟カンパ支出	¥100, 000
		予備費	¥1, 619, 063
合計	¥2, 658, 811	合計	¥3, 065, 979

主な勘定科目別の明細＜一般会計＞

(収入の部)

■会費収入

- ・ 学会会員…大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・京都民科歴史部会・神戸史学会・神戸女子大学史学研究会・神戸大学史学研究会・日本史研究会・歴史学研究会の8学会。会費納入があったのは、歴史学研究会(12,500円)、大阪歴史科学協議会(5,000円)、日本史研究会(5,000円)、京都民科歴史部会(1,000円)で計23,500円(2003年度は33,500円)。
- ・ 今年度は、例年行っていたニュースレター送付時の会費督促を行わず、カンパ依頼を中心に行ったため、納入率が悪くなった。来年度は納入状況を会員に告知することで納入率を上げることに努めたい。

	02会員	03納入	納入率	03新規	04会員	04納入	納入率	04新規	現会員数
学会	8	4	50.0%	0	8	3	37.5%	0	8
個人(一般)	99	95	96.0%	27	126	88	69.8%	14	140
個人(学生)	18	16	88.9%	2	20	6	30.0%	3	23
サポーター	29	34	117.2%	16	45	37	82.2%	6	51
ニュースレター	64	48	75.0%	11	75	43	57.3%	11	86
合計	218	197		56	274	177		34	308

■市民講座資料代・市民講座懇親会参加費 今年度の市民講座は、近世講座(95開催)のみ。資料代収入はその際のもの。しかし、近世講座の参加者が多かったこともあり、目標額の9割近くを得た。一方、会場の都合から懇親会を行えず、懇親会参加費収入を得ることはできなかった。

■書籍・記録集・総括集売上

- ・ 書籍…歴史資料ネットワーク編『神戸と平家』の売上
- ・ 記録集…阪神大震災対策歴史学会連絡会・歴史資料保全情報ネットワーク編『阪神・淡路大震災 歴史と文化をいかに街づくりシンポジウム 記録集』1・2の売上(1部500円)
- ・ 総括集…『歴史資料ネットワーク活動報告書』の売上(1部3,000円、印刷製本費・用紙代など)

■雑収入 取材協力費、利子

■カンパ収入

- ・ 宮城カンパ収入…2003年発生の宮城県北部連続地震用のカンパ。宮城史料ネットに全額送金済み。
- ・ 福井カンパ収入…2004年発生の福井水害用のカンパ。福井史料ネットに一部送金済み(残り5000円未送金)。来年度に残金5,000円を送金予定。
- ・ 災害カンパ収入…2004年発生の連続台風以降、新潟県中越地震など複数の災害が続いたため、特定名称でのカンパ依頼を行わず、「災害カンパ」と総称した。その配分に

については、新潟県中越地震・台風23号・その他の災害で三等分することを運営委員会で決定した。新潟史料ネットには10万円を送金済みである。

(支出の部)

- 専従事務局員人件費 今年度も専従事務局員を確保することができず。
- 事務局行動費 専従のかわりに大学院生に事務局の仕事を依頼した。事務局員の行動費として1人5,000円/月を支給した。支給状況は、人見5月～1月分、河野4～3月分、堀田5～4月、浅利11～4月。水害発生に伴う事務局体制強化のために事務局員の増員を行った結果、予算を超過した。
- 総会諸経費 会場費、告知用はがき代、スタッフ昼食費など。
- 市民講座諸経費 近世講座のみの経費。会場費、告知用郵送代、講師謝礼、スタッフ昼食費など。
- その他企画諸経費 ブックレット『平家と福原京の時代』（岩田書院5月刊行予定）出版に伴う経費、地域資料シンポの分担金、文化財保存修復学会他の後援・共催企画に伴う経費
- 史料整理交通費 今年度の整理は6回と例年の半分に終わったため、使用した経費も少なかった。
- ニュースレター印刷代・郵送代
 - ・印刷代…コピー用紙代、編集・印刷・丁合バイト代。神大文学部の丁合機が故障のため、丁合のための人件費がかさみ予算を超えた。
 - ・郵送代…宅急便代。
- 総括集印刷代 コピー用紙代、印刷代。
- 図書雑誌購入費 『神戸と平家』など。在庫不足により追加購入を行った。

主な勘定科目別の明細＜緊急対応基金＞

◎2004 年度緊急対応基金のみの収支計算

収入		支出	
前年度繰越金	¥905,526	福井水害関係	¥269,630
福井水害関係	¥228,090	○旅費	¥110,400
○旅費寄付	¥45,750	○現地事務局経費	¥25,000
○福井ネットからの返金	¥182,340	○郵送費（NL特別号）	¥33,600
台風23号関係	¥221,689	○福井ネットへの貸付金	¥100,000
○旅費寄付	¥221,689	○振込手数料	¥630
寄付金	¥6,700	台風23号関係	¥815,270
		○旅費	¥564,942
		○水損史料修復消耗品	¥110,943
		○水損史料搬送代	¥92,885
		○食費補助	¥46,500
		ボランティア保険	¥16,500
		その他備品消耗品	¥46,944
		宮城カンパ支出（昨年度分の残り）	¥7,639
		次年度繰越金	¥206,022
合計	¥1,362,005	合計	¥1,362,005

(収入の部)

■福井水害関係

- ・ 旅費寄付…奥村弘・松下正和分
- ・ 福井ネットからの返金…内訳は、支出の部の「福井ネットへの貸付金」、「郵送費（NL特別号）」、「旅費」のうち大学院生の分。

■台風 23 号関係

- ・ 旅費寄付…松下正和・木村修二氏分

(支出の部)

■福井水害関係

- ・ 旅費…福井市内などの被災地までの電車賃
- ・ 現地事務局経費…史料ネットから派遣した事務局員の人件費
- ・ 郵送費（NL特別号）…通常の年 4 回発行のニュースレターの他に、福井水害の特集号としてニュースレターを発行し、カンパを募った。その際の郵送費。
- ・ 福井ネットへの貸付金…福井史料ネットの当面の活動資金用として史料ネットの緊急対応基金より、貸付金を支出した。
- ・ 振込手数料…福井水害のためのカンパを福井史料ネットワークに送金した際の手数料。

■台風 23 号関係

- ・ 旅費…但馬・丹後・丹波地域までの電車賃。播磨・淡路・但馬・丹後・丹波までのレンタカー代・ガソリン代など。
- ・ 水損史料修復消耗品…水損した史料を乾燥させるために使用したキッチンペーパー、防かびのためのエタノール・霧吹き・ビニール袋・ジッパー付袋、作業の際のマスク・手袋・白衣、真空凍結乾燥実験用の水損サンプル和紙代など。
- ・ 水損史料搬送代…被災地（日高町・出石町）から史料ネット事務局までの搬送代、史料ネット事務局から真空凍結乾燥機保有施設（安土城考古博物館）までの搬送代など。
- ・ 食費補助…乾燥作業に従事していただいた学生さんへのお茶代・弁当代など

■ボランティア保険 2005 年 3 月末日までのボランティア保険代

■その他備品消耗品 住宅地図など

[参考資料3] 2004年度会計監査報告

2005年5月14日

2004年度会計監査報告

歴史資料ネットワーク会計監査委員

北泊 謙太郎 (印)
鎗山 善理子

上記の監査委員は、歴史資料ネットワークの2004年度会計監査を実施しましたので、以下の通り報告いたします。

記

- 1 監査実施年月日 2005年5月14日
- 2 監査対象期間 2004年5月1日～2005年4月30日
- 3 監査の資料
 - ① 2004年度決算報告書（一般会計、及び緊急対応基金のみの会計）
 - ② 一般会計通帳収支書類・緊急対応基金収支書類
 - ③ 手持現金出納簿
 - ④ 領収書
 - ⑤ 銀行預金通帳・郵便貯金通帳
 - ⑥ 郵便振替受払通知票および払込取扱票
- 4 監査の結果
上記の期間における歴史資料ネットワークの収支状況および現金の出納については、適正に処理されているものと認めます。
- 5 監査の意見
限られた収入の中で出費を抑制しつつ厳正な会計処理が行われており、運営委員および事務局員の皆さんの努力がうかがえます。その一方で、例えば専従事務局員人件費が今年度は執行されないなど、特定の事務局員への負担が過重になっている点が憂慮されます。限られた予算の範囲内で経費を節減することは勿論大切なことですが、必要なお金はきちんと執行して、積極的な活動をおこなうことを望みます。

以上

[参考資料4] 2005年度活動方針

1. 被災史料の整理や被災地での調査活動

阪神・淡路大震災後の救出活動で保全された歴史資料のうち、事務局保管の未整理分について引き続き院生・学生・市民などのボランティアを中心にした作業を進める。また、過去に救出した被災史料の現状の把握と今後の活用をはかるために、追跡再調査を含めた総合史料調査を、引き続き神戸市文書館や神戸大学文学部地域連携センターと協力して進める。

2. 市民や自治体との連携を重視した地域史研究や地域遺産保存・活用の取り組み

歴史研究の成果や地域遺産の活用に関する市民と研究者の交流の場としての「歴史講座」を今年度も実施する。また関係諸学会・大学や研究機関等とも連携し、地域史や史料保存・活用などの研究成果の蓄積をめざす。さらに、地域史の掘り起こしや地域遺産の活用をはじめ、地域の歴史・文化に関わるさまざまな市民・自治体の取り組みへの積極的な連携や支援を継続していく。

また博物館・資史料館存続問題や指定管理者制度導入など、地域資料をとりまく新たな状況に関する情報収集と対応につとめる。

3. 震災記録保存と地域資料保存

関係団体や市民との連携と意見交流をはかり、阪神・淡路大震災の資料保存と記録化・活用に関する研究会を今年度も引き続き開催し、「地域資料の保存と活用を考える」研究会に積極的に協力する。また人と防災未来センターをはじめ、災害史などこの分野に関する研究会や展示企画への参加や見学を行うとともに、資料保存の必要性について行政への働きかけを続ける。

また史料ネット事務局に保存されている史料ネット活動に関する資料の整理を行う。

4. 災害対策

山陰・愛媛・宮城・福井・新潟などの各史料（資料）ネットをはじめ、各地の関係機関・団体との交流と連携を継続する。また、東南海大地震のような大規模地震や、風水害対策の研究と準備を関西で引き続き行うとともに、京都における「動産文化財防災研究会」などの活動を援助する。各自治体の地域防災計画で地域遺産の保全をはかるなどのはたらきかけを行う。さらに、新たに大規模災害が発生した場合には、情報把握や関係機関・団体・研究者の連絡にあたり、臨機応変に緊急対応基金を活用して救援体制の立ち上げを積極的に支援する。

また昨年度以来対応にあたっている水害対策についてのまとめも行う。

5. 組織と運営

ホームページによる各方面への情報発信の充実を引き続きはかる。ニュースレターは定期刊行を維持するとともに、内容の充実に努める。また、メールニュースの配信を維持し、企画や活動のアウトラインをすばやく伝える。既発行の書籍・報告集については、引き続き頒布努力をおこなう。さらにニュースレターの購読者の会員加入を呼びかけるなど、会員やサポーターの拡大に積極的に取り組む。

関係諸学会との連携をより一層深め、企画の共催や後援を行い、その成果を各学会の誌面に反映させる。

[参考資料5] 2005年度予算（自2005年5月1日 至2006年4月30日）

◎2005年度 一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	¥1,619,063	専従事務局員人件費	¥950,000
会費収入	¥984,000	事務局行動費	¥10,000
○学会会員	¥44,500	委員会運営費	¥50,000
○個人会員（一般）	¥655,000	事務局臨時経費	¥50,000
○個人会員（学生）	¥57,500	通信・発送費	¥20,000
○サポーター	¥141,000	総会諸経費	¥40,000
○ニュースレター	¥86,000	市民講座諸経費	¥140,000
市民講座資料代	¥100,000	その他企画諸経費	¥50,000
市民講座懇親会参加費	¥75,000	史料整理交通費	¥90,000
書籍・記録集・総括集売上	¥300,000	ニュースレター印刷代	¥50,000
2003年度会費未納分	¥41,000	ニュースレター郵送代	¥175,000
2004年度会費未納分	¥296,000	総括集印刷代	¥20,000
		図書雑誌購入費	¥250,000
		備品消耗品代	¥100,000
		ブックレット出版企画	¥100,000
		福井カンパ支出	¥5,000
		新潟カンパ支出	¥40,000
		緊急対応基金へ	¥350,000
		予備費	¥925,063
合計	¥3,415,063	合計	¥3,415,063

主な勘定科目別の明細＜一般会計＞

（収入の部）

■会費収入、2003・04年度会費未納分

	年会費	03未納数	03未納額	04未納数	04未納額	05予定数	05予定額
学会		4	¥0	5	¥15,000	7	¥44,500
個人（一般）	¥5,000	4	¥20,000	38	¥190,000	131	¥655,000
個人（学生）	¥2,500	2	¥5,000	14	¥35,000	23	¥57,500
サポーター	¥3,000	0	¥0	8	¥24,000	47	¥141,000
ニュースレター	¥1,000	16	¥16,000	32	¥32,000	86	¥86,000
			¥41,000		¥296,000		¥984,000

- ・ 個人会員・サポーター・ニュースレター…2004年度会員数から既納者数を引いた人数をもとに算出
- ・ 2003、04年度会費未納分…上表を参照

■神戸市との共同事業「市民から引き継いだ古文書整理等」での事務管理費を別途繰り入れる予定

（支出の部）

■専従事務局員人件費

- ・ 時給 850 円×4 時間×5 日×4 週間×12 ヶ月+雇用保険+交通費（上限月 1 万円）
- ・ 適任者がいない場合、事務局員（4 人を予定）に行動費を支給
5,000 円/月×12 ヶ月×4 人=240,000 円

- 事務局行動費 前年度未払い分
- 委員会運営費 運営委員会会場費、運営委員への通信費など
- 通信・発送費 ニュースレター以外の郵送費
- 総会諸経費 総会に伴う外部講師謝礼・交通費、会場費などの経費
- 市民講座諸経費 市民講座開催に伴う外部講師謝礼・交通費、会場費、資料作成代などの経費
- 史料整理交通費 レスキューした被災史料整理に従事するボランティアへの交通費・食費の補助
- ニュースレター印刷代 用紙代、発送バイト代
- ニュースレター郵送代 35,000 円×5 回分（2004 年度最終号+2005 年度 4 号分）
- 図書雑誌購入費 『神戸と平家』、岩田ブックレット『平家と福原京の時代』購入費
- ブックレット出版企画 2004 年度シンポジウムの出版企画などの経費
- 福井カンパ支出 福井史料ネットワークに未払いの分（406,133-401,133=5,000 円）
- 新潟カンパ支出 災害カンパの 1/3（=約 14 万）を新潟ネットに寄付（災害カンパを新潟・台風 23 号・緊急対応基金で三等分することは運営委了承事項）。10 万は 2004 年度で支払い済みにより残額の 4 万を寄付。

◎2005 年度 緊急対応基金

前年度繰越金	¥206,022	台風 23 号関係	¥210,000
台風 23 号関係	¥236,388	○旅費	¥100,000
○旅費助成（神戸市より）	¥236,388	○水損史料修復消耗品	¥50,000
一般会計より補填	¥350,000	○水損史料搬送代	¥50,000
		○食費補助	¥10,000
		ボランティア保険	¥10,000
		その他備品消耗品	¥50,000
		次年度繰越金	¥522,410
合計	¥792,410		¥792,410

（収入の部）

- 旅費助成 神戸市市民参画推進局市民活動支援課「協働と参画のプラットフォーム」から、史料ネットの台風 23 号被災地でのレスキュー活動に対して「パートナーシップ活動（=被災地を支援する市民活動 A・B 活動）助成金」が給付されることに決定（2004 年 11 月 19 日）。給付時期は未定。
- 災害カンパより補填・一般会計より補填 一般会計予備費より 35 万円分を補填

（支出の部）

- 台風 23 号関係 但馬（豊岡市日高町）、丹後（舞鶴市・京丹後市・福知山市）で引き続き被災史料調査活動を展開中。現在真空凍結乾燥中の水損史料の展開作業の際にも、安土城考古博物館からの搬送代、展開作業のためのアルバイト代などが必要。また史料の返却の際にも搬送代・文書箱などの経費が必要。

[参考資料6] 2005年度運営委員・事務局体制

<運営委員> (五十音順、敬称略)

- 大阪歴史科学協議会 石田真貴美、佐賀朝、吉川潤
- 大阪歴史学会 吉村真樹子
- 京都民科歴史部会 松下正和
- 神戸史学会 大国正美
- 神戸女子大学史学会 (欠員)
- 神戸大学史学研究会 奥村弘
- 日本史研究会 添田仁
- 個人委員 加藤宏文、藤田明良

<事務局>

- 代表 奥村弘
- 副代表 藤田明良
- 事務局長 松下正和
- 事務局員 浅利文子、板垣貴志、河野未央、人見佐知子、堀田昌宏

<会計監査(2名)>

河島真(神戸大学百年史編集室)、辻川敦(尼崎市立地域研究史料館)

[参考資料7] 神戸市文書館との共同事業実績報告及び決算書

別紙3-2

事業実績額		(9,000, 000円) 9,000, 000円 (①+②+③)
事業実績額の 積算内訳	1. 人件費に要する経費	1 人件費 【新規雇用の失業者に係る人件費】11名 ・新規雇用(調査・入力) 3名 (給与7600×224日)+通勤手当204680+労災保険9535=1,916,615円 ・新規雇用(古文書解説・入力・ソフト開発) 8名 (給与10000×249日)+通勤手当210840+労災保険13505=2,714,345円 ①小計 4, 630, 960 円 【その他労働者に係る人件費】3名 ・指導職員(古文書解説等) 2名 (給与13000×117日)+通勤手当74800+労災保険7975=1,603,775円 ・指導職員(システム開発等) 1名 (給与25000×37日)+通勤手当44400+労災保険4850=974,250円 ②小計 2, 578, 025 円 (①+②) 7, 208, 985 円
	2. 人件費以外に要する経費	【事務物件費】 物件費 整理箱・資料カード・パソコンレンタル料等 1,191,015円 その他事務管理費等 600,000円 ③小計 1, 791, 015 円
	3. 市町事務費	
	事業費に占める人件費割合	80.1%
事業に従事した全労働者数		14人(実人員)
上記のうち新規雇用の失業者数		11人(実人員)
事業に従事した全労働者数に占める新規雇用の失業者割合		78.6%
新たに雇用された労働者の雇用・就業期間		1. H16年10月26日から、H17年3月31日までの5ヶ月と6日間 2. H16年10月26日から、H17年3月31日までの5ヶ月と6日間 3. H16年10月26日から、H17年3月31日までの5ヶ月と6日間 4. H16年10月26日から、H17年3月31日までの5ヶ月と6日間 5. H16年12月24日から、H17年3月31日までの3ヶ月と8日間 6. H17年2月14日から、H17年3月13日までの1ヶ月と0日間 7. H17年2月14日から、H17年3月31日までの1ヶ月と18日間 8. H17年2月14日から、H17年3月31日までの1ヶ月と18日間 9. H17年2月14日から、H17年3月13日までの1ヶ月と0日間 10. H17年2月22日から、H17年3月29日までの1ヶ月と8日間 11. H17年2月22日から、H17年3月31日までの1ヶ月と10日間

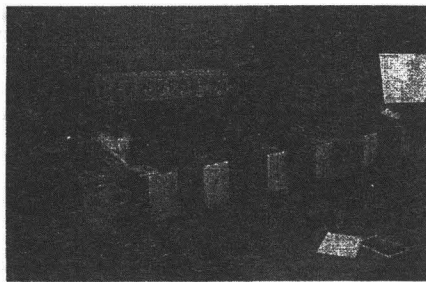
【シンポジウムの記録】風水害から歴史資料を守る

- ・日時 2005年6月18日(土) 13時～16時45分
- ・場所 尼崎市立小田公民館1階ホール
- ・報告 多仁照廣氏(福井史料ネットワーク副代表、敦賀短期大学教授)「福井史料ネットワークの活動」
木村修二氏(神戸大学文学部地域連携センター研究員)「台風23号による被災資料調査・レスキュー活動」
河野未央氏(神戸大学大学院文科学研究科生)「台風23号による水損資料の修復について」
- ・コメント 前田喜一氏(但馬史研究会)、小寺誠氏(豊岡市教育委員会)、
加藤晃氏(舞鶴地方史研究会)、吉岡博之氏(舞鶴市教育委員会)
- ・プレゼン 富澤孝雄氏(京丹後市ふるさと歴史研究会幹事)
- ・コーディネーター 松下正和(歴史資料ネットワーク事務局長、神戸大学文学部助手)

【シンポの開催の目的】

2004年は、夏以降の連続風水害や10月の新潟県中越地震など大規模な災害に見舞われた一年となってしまいました。とりわけ、7月の新潟・福井水害や日本列島に台風が10個も上陸するなど、近年まれに見る風水害の多かった年でもありました。史料ネットは、阪神・淡路大震災以降に各地で発生する大規模地震への対応を行ってまいりましたが、2004年になって新たな対応をはじめました。それは、風水害への本格的な対応です。福井水害に対しては、被災史料調査、現地のネットワーク作りやカンパ活動などの協力を行い、「福井史料ネットワーク」が立ち上がることとなりました。幸い福井では、史料の目だった水損事例は発見されませんでした。しかし、10月に発生した台風23号では、兵庫県や京都府を中心として多くの人的被害や住宅被害がみられ、史料の水損も多数確認されました。事務局から被災地までが近かったこともあり、台風23号に関しては史料ネット事務局が直接保全活動を行うこととなりました。今回の保全活動については、被災地の行政や地元の地域史研究団体や近辺の大学、また民間企業など多くの方々の協力をいただき、結果として兵庫県内では日高町や出石町、京都府内では舞鶴市や京丹後市から多くの水損史料を保全することができました。このように、被災地の行政や住民と連携して被災史料の保全活動を行うことの重要性を改めて痛感いたしました。一方で水損史料はカビなどによる腐敗の進行が早く、早急な措置をしなければ一層廃棄が進むことが判明したとともに、水損しても真空凍結乾燥により処置すれば修復可能な場合もあることが改めて実証されました。

このように、水害による被災史料と地震のそれとはいくつかの点で異なっております。そこで、今回のシンポジウムでは、「風水害から歴史資料を守る」と題して、福井史料ネットワーク副代表の多仁氏から、同ネットワークの成立経緯や活動について、神戸大学文学部地域連携センター研究員の木村修二氏から被災地の行政・住民との連携によりおこなった被災史料保全活動について、神戸大学大学院文科学研究科の河野未央氏から水損史料の修復処置方法について、それぞれご報告いただきました。また、今回の台風23号による被災史料保全活動にご協力



を賜った被災地の行政・住民の代表として、但馬史研究会会長の前田喜一さん、出石町教育委員会の小寺誠さん、舞鶴地方史研究会副会長の加藤晃さん、舞鶴市教育委員会の吉岡博之さんからそれぞれコメントを頂戴し、京丹後市ふるさと歴史研究会幹事の富澤孝雄さんには水損ふすまのカビとり作業や下張りはがしの様子などをスライドで報告していただきました。

史料ネットワークのようなボランティア団体が主体となって、被災地の行政や住民と連携しながら、これだけ大量かつ状態の悪い水損史料を保全した事例は全国的に見てもほとんどなかったのではないかと思います。今回のシンポジウムでは、これまでの水損史料保全活動の成果と課題について検討するとともに、今後地球温暖化に伴って頻発すると予想されている風水害への事前対応、防災体制の構築にむけても提言を行うことを意図して企画いたしました。以下、当日の報告と討論の概要を紹介いたします。

【多仁報告の概要】

主に①2004年7月に発生した福井水害と史料被災の特色について、②福井史料ネットワーク設立の経緯、③福井史料ネットワークの活動を通じて明らかになったことと課題、の以上3点について報告があった。

①については、豪雨水害の被害にあった上流部では、史料を保管する家の多くは被災を受けない場所にあったこと、堤防決壊のあった中流域では新しい住宅地が多かったために、幸いなことに古文書に関しては、めだった被害はなかったことが紹介された。水害では、そもそも被災を受けた史料は流失すれば残らないし、水害経験地区では2階で保管するなどの対応で残ることが一般に多いと指摘した。②7月25日に結成された「福井史料ネットワーク」結成の経緯について説明があり、活動内容についても紹介があった。ネットワークのメンバーによって、県史や各自自治体史編纂時のリストに基づき作成した史料所在一覧をもとに、被災市町ごとに旧家などを訪問し被災史料の有無を確認した。その過程の中で史料の無事を確認し、また新史料を発見することもあった。③福井史料ネットワークの活動を通じて、条例の制約内で県公文書館が最大限役割を果たしたが、事務局の設置の際や、活動の主体となる嘱託職員には権限がないなど限界があること、県史編纂の際のリスト以外に歴史資料の所在情報が未把握であったこと、史料の保存修復ネットワークの整備が必要であること、未指定・個人所蔵の被災文化遺産への施策が立ち遅れていること、地域から滅失する史料を守るために組織化が必要であることなどが明らかとなった。また、大学で修復・保存の技術者を養成してもその就職先がないために人材が育たないこと、小・中・高の教員の参加がないなど地方では資料保存の担い手となる人材が枯渇していることが課題として挙げられた。



【木村報告の概要】

木村氏からは、史料ネット事務局が行った台風23号による被災資料調査・救助活動について報告があった。史料ネット事務局の事前準備として、「災害状況の把握」「FAXの送信、関係機関への電話連絡」「データ

〔所蔵情報〕の収集」「調査対象地の地図作成」などの説明があった。続いて被災地での活動の概要が紹介された。被災直後の2004年10月からは但馬地方（兵庫県域）を中心とした巡検調査・レスキューを、2004年12月からは丹後地方（京都府域）を中心とした巡検調査・レスキューを、翌年2月からは丹後での水損史料修復作業を行った。丹後の調査以降、被災地の行政・地元研究者・史料ネットの三者による「協議会」を現地調査の事前に行い、地元の理解が得られた場合に協力して被災史料調査・保全活動を行うというスタイルが定着したことが指摘された。受け入れ行政や地元研究者は、所蔵者への事前連絡や、地域情報に関する説明を行い、史料ネットが訪問時に趣旨の説明や水損史料の処置のアドバイスをを行うなど、三者が役割分担しながら活動を行った。被災の程度がひどい場合はレスキューを行ったが、その方法は、現場での洗浄（泥落とし）、ビニール袋づめ、ダンボールへの梱包、現場からの搬送という流れであった。その結果、日高町M家から近代史料17点、同町T家から近世～近代史料ダンボール10箱超、出石町H地区から区有文書ダンボール10箱超、舞鶴市M家から近代史料4点、京丹後市久美浜町から水損襖約50枚をレスキューすることができた。

最後に、今回の被災調査・救出活動が神戸の史料ネットによる直接的な水害対応としては初めての事例であったこと、被災地の自治体・地元研究者や住民・史料ネットによる三者の連携があつてはじめて可能となったこと、ライフライン復旧後の早急かつ積極的な被災史料調査の必要性などが指摘された。しかし、一方で「被災の連絡がないから大丈夫」として被災史料調査に協力をしていただけなかった事例もあったこと、郡部では活動の拠点となる大学がなく神戸の史料ネット事務局が直接対応せざるをえなかったこと、自治体の文化財担当職員が主に災害復旧に対応せざるをえない状況下にあること、水損史料はカビやすく地震による被災資料よりも一層廃棄されやすい点、真空凍結乾燥機の確保など、クリアすべきさまざまな課題が指摘された。

〔河野報告の概要〕

台風23号被害に遭った史料の救出後の処置について報告があった。水損史料の修復処置は①大学での修復乾燥作業、②各自治体の機関における修復乾燥作業の二つがあり、それぞれについて報告した。

①は、専門家の指導のもと、キッチンペーパーを利用した吸水乾燥作業を行ったこと、そのような作業には、数多くの市民・学生・院生にボランティアとして参加していただいたことなどを紹介した。そして作業にあたるなかでの三つの問題点を指摘した。第一に泥水につき、黴が発生している史料を扱うため衛生面での不安が残ること、第二に黴・腐敗など二次的被害が進行しているため、迅速な措置が求められるにもかかわらず、キッチンペーパーでの作業は時間がかかること、第三に膨大な数の史料を一度に処置する必要があるため、多数のボランティアが必要であるが、そのボランティアを受け入れる体制作りが十分でなかったこと（ボランティア・リーダーの不在）である。ボランティアによる作業の限界とともに、ボランティアの組織化の必要性を指摘した。

②については、史料の二次的被害の進行を阻止するため、未処理の史料をダンボールに詰め、さしあたって冷凍会社に保管したこと、各自治体や企業で真空凍結乾燥機を持つ機関と交渉し



た結果、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・滋賀県立安土城考古博物館・神戸市埋蔵文化財センターなどに協力いただき、乾燥作業が終了させることができたことを報告した。乾燥作業を行える各機関との連携・機関相互の連携の必要性を指摘した。

最後に史料返却に向けて、「返し方」などが今後の課題となることを挙げた。

〔コメント〕



(前田喜一氏) 但馬地域の被災史料の保全活動について、本来ならば地元の但馬史研究会がやるべきだったかもしれないが、そういう力もなかったので史料ネットとともにいった。また個人的には古文書の所在を知っていたが、但馬史研究会としては把握をしていなかった。町史の目録も把握の密度にばらつきがあった。所蔵者が史料を提供した際に大学や機関から返却されないこともあったために、史料所在の調査の際に「史料などありません」といわれるのではないかと。史料ネットに対しては、

道案内をし、共同で被災確認とレスキュー作業を行うことができた。日高町のT家のレスキューに関して、Tさんがとても感動しておられた。レスキュー自体がいい啓蒙活動になっている。ただ、個人での管理はすでに限界がきている。文化財指定や寄託を募るなどやはり新市できちんと管理すべきではないか。コピーした古文書を地域で活用できればなおよいだろう。

(小寺誠氏) 行政担当者の立場からすれば、災害直後はまず日常生活の復旧支援を行うことが優先となる。とりわけ子供にとって安全な場所を確保するためにも学校の復旧が一番の要求だった。そのような中、町史で利用した資料や山城の被害確認や被災箇所の応急処置を行ってきた。各地区に担当職員がはりつき社会福祉関係とともに住民から要望を聞き、各区に対して被災文化財の救済について呼

びかけたが支援の要望はなかった。文献史料所在リストの不備は問題だった。公民館の文書も盲点だった。災害時の史料ネットの役割は大きいだろう。

(加藤晃氏) 丹後の文献所在についての情報がなかったので、今年度には是非やってみたい。舞鶴地方史研究会としての対応の不備を痛感した。史料救出を目的とする中での市民研究者の役割は大きいだろう。史料所蔵者は大人数での調査に恐怖をいだく。その際に地元の言葉で対応する必要があるだろう。また文書調査の訓練を行い、



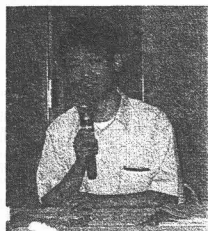
調査の対応ができる人材を育成する必要性を感じた。古文書読解のボランティアも要請する必要がある。

(吉岡博之氏) 舞鶴の被害は由良川沿いの志高地区をはじめとして、50年に一度というぐらいの規模だった。ゴミの山も5000トンを超えた。古文書史料の所在調査は行政の責任だが、専門の対応職員がい



ないのが現実。住民と協力しながら行うことが必要。そもそも誰のための史料かという点を所蔵者に理解してもらう必要がある。史料ネット活動が、まちづくりとも関係する点が重要である。

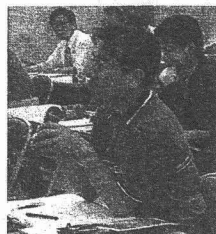
【討論】



(司会＝松下正和) これまでのご報告とコメントをふまえて、今日は被災対応のあり方について1点目に保全の具体的な成果と問題点から、2点目に水害による被災の特色である水損史料修復の側面から検討し、3点目に防災対応のあり方について議論したい。まずは、1点目についてご意見を。

(辻川敦氏・尼崎市立地域研究史料館) 国立公文書館のワークショップで海外の事例についての議論を紹介してほしい。

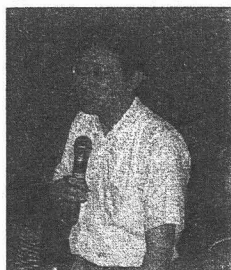
(多仁照廣氏) 昨年12月に行われた史料取扱講習会のワークショップで、私はアーカイブズ講座を担当した。海外での事例では、歴史資料は国民の権利を守るものとして位置づけられている。史料の被災は文書館が対応するのが理想。和歌山県と長野県の史料担当者は業務として史料所在確認調査を行うことになっている。



(司会) 福井史料ネットワークの場合は県文書館と図書館、大学などのメンバーが中心となって所在確認を行ったが、兵庫県と京都府の場合はこれらの県と比較してどうか。

(木村修二氏) 私は神戸大学文学部の地域連携センターに所属して神戸市内の文献資料所在把握調査を主に担当している。兵庫県の場合、郡部では文献専門の担当者がいないケースが多く、大学が中心となって調査に協力した地域があった。

(司会) 兵庫県の場合、県政資料館が持っていた県史編纂時の所蔵者データを提供していただき、被災史料調査の際に役だったが、一方でデータの古さも目立った。所在調査のデータは常に更新する必要があるが、文化財行政が縮小しつつある現在、対応が難しくなっている。その点についてどうすべきか。



(奥村弘氏・神戸大学文学部) 大規模災害時の行政の役割については、地域防災計画に規定されているが、文化財の項目が少ない。被災直後に館自身をどうするのか、地域遺産をどうするのかという二つの問題がでてくる。通常、大規模災害時には自治体職員は復興作業に従事せざるをえない。災害時に文化財担当職員が地域遺産の保全活動ができる体制作りのためにも、地域防災計画の中に文化財保全に関する項目を加えてもらえるよう働きかけてもらいたい。

(多仁照廣氏) 地域防災計画にあったとしても、ライフライン復旧が優先されていたのが実態。防災ボランティア組織に歴史遺産保全の必要性を認識してもらい、市民運動として位置づけていくことも必要。その活動成果は「字史」の形で歴史を編纂し地域に還元していくことにしている。そうすることで、住民にも地域遺産を意識してもらえるのではないかな。

(辻川敦氏) 県レベルでの対応については、幻想をもたないほうがよい。地域社会に貢献していくことを通じて、地域レベルでまちづくりをしてはじめてでてくるもの。下からの仕組みが必要。行政だけではやりきれないことを職員がどう学ぶのが大事。

(前田喜一氏) 但馬史研究会としては、旧町ごとに古文書の所在把握調査をしていきたい。

(司会) 2点目の修復の話にうつりたい。今回は兵庫県教育委員会の斡旋のおかげで水損史料の真空凍結乾燥が実現した。この点に関わって、コメントをいただきたい。

(中川弘氏・兵庫県教育委員会) 阪神淡路大震災の際、洲本市の火災消火時に水損した史料を徳島県立博物館にて乾燥処理をしてもらった。今回史料ネットから乾燥依頼があったときに徳島に依頼しようとしたが、徳島の乾燥機は小さく、大量の水損史料の乾燥が無理だった。兵庫県を含め近畿では二府四県の枠組みで「官」どうしの協力関係が構築されていた。そこで、県は滋賀県に協力を依頼し、安土城考古博物館での乾燥が実現した。今回の件もふまえ、防災研究会を立ち上げようという動きもある。真空凍結乾燥は史料を痛める可能性あり。基本は自然での乾燥がよい。また税金を使って私有財産である未指定文化財の水損史料を乾燥している以上、史料保存の意義も含め地域へどう還元していくかが課題。

(司会) 但馬の史料は、大学に持ち帰って乾燥するという方式をとったが、舞鶴でのレスキュー以降丹後の史料は現地で修復乾燥するという方式をとった。舞鶴市のM区有文書は区長さんのお宅の一室をお借りして乾燥作業にあたった。京丹後市では、ふるさと歴史研究会の富澤さんの仕事場で水損ふすまの下張りはがしをしていた。そのあたりの話をスライドの画像を交えてうかがいたい。

(富澤孝雄氏) 史料ネットには1月末から京丹後入りしていただいた。

「史料など家がない」という認識のお宅がほとんどだった。今回の史料も焼却処分されるところを救出したもの。私は木製建具の職人なので、指導をうけながら始めた。

(スライドでふすまの下張りはがしの様子、下張りの層序の記録方法などを提示)

下張りの層を1枚ずつはがすのは大変だった。1枚ずつ濡らしはがしていくとその間にカビが生えるし、はがした1枚ずつに番号をつけると膨大な枚数になり大変となる。そこで、やり方をかえて層ごとにめくこととした。

今では半分ぐらい処置を行った。

(司会) ふつうの下張りはがしとは異なり、史料ネットが行う作業は緊急対応的な要素を含んでいる。そういう意味では、必要最低限の現状記録をとりつつも、やはりある程度スピーディーで簡略な方法の開発ということも行う必要があるのではないか。その点でも富澤さんの指摘は重要だと思う。この点について、修復のボランティアリーダーとして活動した河野さんほどのように考えるか。

(河野未央氏) 確かに1枚ずつはがすのは難しい。日高町のT家の場合、ふすまの骨を返してほしいということだったので、1枚ずつはがすという当初の方針から、まず層ごとにはがすことに変更し、返却に向けて作業を行っている。富澤さんの方法は参考になった。

(村田忠繁氏・元興寺文化財研究所) 修復に関わるネットワークを作って活動を広げてほしい。河野さんの報告で真空凍結乾燥によって固着してしまったものがあるとのことだが、ちゃんと展開できる。また真空凍結乾燥は万能ではないという意見もあったが、日本だからこそ凍結ができるのであって、真空凍結乾燥したくてもできないところがたくさんある。

(司会) 人も金もないなかでどのように防災対応のための体制作りをしていけばよいのかを報告者に伺いたい。大学や学会は人的な貢献やノウハウの提供など、自治体や地元研究者は史料の所在把握など、それぞれの役割があるだろう。また、それらをネットワーク化するための人材の育成や情報の共有などクリアすべき様々な課題もあろうかと思うが、その点についてはどのように考えるか。最後にお話しいただきたい。



(多仁照廣氏) 第56回の地方史研究協議会敦賀大会では新しい試みとして、ポスターセッションを行い、地元の郷土史団体にも自分たちの活動を紹介してもらうことにしている。ここにお集まりの皆さんにも是非参加していただき、新たなネットワーク化をはかってほしいと思う。私たちは、史料を保存していくという関心をもっている。修復の方法も元興寺さんから学びながら開発を進めている。歴史研究者だけが史料をまもるのではない。アーカイブズの問題も歴史研究のための史料だけという問題ではないということを確認すべき。歴史研究のためだけの保存だと活動にも広がりがなくなってくるのではないかな。

(木村修二氏) 過去の大災害を乗り越えて助かった史料はそれだけで貴重なもの。これらの史料を三者の連携で今後も保全していきたい。

(河野未央氏) 修復に協力いただいているボランティアの市民の方々は、阪神淡路大震災の被災資料整理活動にたずさわったり、その史料を用いたミニ講演会に参加された方が多い。こういう史料を救ったことでこういう地域の歴史がわかったということを提示し、地域に還元する

ことから始めることが、今後の防災という点に関わって重要になってくると思う。緊急モードも大切だが、一旦切り替えて日常モードではどのような活動を行うかを検討することも大事ではないか。

(司会) 史料ネットの活動としては、水損史料の乾燥処置が現在も続いています。今後とも私たちの活動にご理解とご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。では、最後に報告者とコメントーターの皆さんに拍手をお願いいたします (拍手)

(文責：松下正和)

追悼

前田喜一氏(但馬史研究会)が二〇〇五年八月に永眠されました。

二〇〇四年台風二十三号による但馬地域の被災調査の際、但馬史研究会の会長職として、水損史料レスキューにも同行いただきました。我々の調査に惜しみないご助力を賜りました。故人のお人柄に直接接し、研究への熱心さ、地元への愛情を感じることができました。

故人のご協力に感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

一〇〇六年二月
歴史資料ネットワーク 代表 奥村 弘

歴史 保全へ官民の連携を

地域の文化財をいかに守り、後世へ伝えていくか。災害で被災した古文書などの救出を続ける「歴史資料ネットワーク」(事務局・神戸大学文学部、略称・史料ネット)がこのほど、シンポジウム「風水害から歴史資料を守る」を尾崎市立小田山市民会館で開いた。専門家が史料保護の課題と期望を報告。「地域と行政、大学の連携」を訴えた。(仲井雅史)



「研究サードの発掘だけでは歴史資料は守れない」など意見を述べた「尾崎市立小田山市民会館」

「史料ネット」がシンポ 所在確認が課題

「研究サードの発掘だけでは歴史資料は守れない」など意見を述べた「尾崎市立小田山市民会館」

史料ネットは阪神・淡路大震災を機に誕生。昨年度、福井県の中津市や滋賀県立安土城考古博物館の協力で、夏空津結死初め対応。洪水に遭った家屋で史料の被害状況を調査した。



「史料ネット」は、一連の経緯を報告。史料ネットは、神戸大学文学部歴史学系、尾崎市教委、神戸市教委、尾崎市立安土城考古博物館の協力で、夏空津結死初め対応。洪水に遭った家屋で史料の被害状況を調査した。

「史料ネット」は、一連の経緯を報告。史料ネットは、神戸大学文学部歴史学系、尾崎市教委、神戸市教委、尾崎市立安土城考古博物館の協力で、夏空津結死初め対応。洪水に遭った家屋で史料の被害状況を調査した。

▲2005年7月5日付『神戸新聞』
(神戸新聞社提供)

野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』の舞台となったゆかりの地を見学する企画が「火垂るの墓を歩く会」である。1999年から毎夏開催している。『火垂るの墓』はご存じのとおり、野坂氏の実体験に基づいて書かれた小説である。「歩く会」では、①甲陽園・苦楽園周辺コース、②香櫨園浜コース、③御影コース、というスポットを毎年順番に巡っており、7年目となる今年は戦後60年という節目の年でもある。今回は3度目となる①の甲陽園・苦楽園周辺コースのウォークが実施され、例年どおり告知や申し込み受付などの面で歴史資料ネットワークの全面的な協力を得た。

【日時】2005年8月7日（日）および9日（火）午前9：30～12：00

【コース】甲陽園・苦楽園周辺コース
（阪急苦楽園口駅改札口集合～満池谷墓地・神原公民館・ニテコ池・大社小学校西田公園にて解散）

【主催】火垂るの墓を歩く会実行委員会

【協力】歴史資料ネットワーク

【参加者】7日 56人 9日 64人
（両日ともマスコミ・報道関係者込み）

【実施内容】

（〔実施内容〕は筆者の参加した8月9日の行程を記しています。そのため7日とは若干の差異があることをあらかじめお断りしておきます。）

酷暑のなか、両日とも定員を超える多くの参加者があった。テレビでもたびたび放送されている「火垂るの墓」を軸に戦争企画を実施する方法は、誰にでも親しみやすく、毎年、多数の参加申し込みがある一番の理由と考えられる。9日は「大人向け」と銘打っているにも関わらず、大勢の親子連れの参加もあり、市民の関心の高さをうかがうことができた。

かく言う私も実は今回が初めてであり、せっかくの機会であることからボランティアとして参加した。初参加の私の眼から今回のウォークを振り返ってみたい。

集合場所の苦楽園口駅改札口から夙川沿いの公園へとボランティアが誘導し、そこで説明資料を配付する。この公園で実行委員会代表の正岡茂明さんからの簡単な注意事項の説明のあと出発となった。

まず、戦没軍人の墓碑が多く目につく満池谷墓地^{まんちだに}を抜け、清太が節子を火葬した場所と推定できる丘の横を通りつつ、神原公民館へ向かう。清太と節子が身を寄せた“お婆さん”の家やその周辺、二人で暮らした池の畔にあった防空壕の場面を中心に正岡さんが編集してきたアニメ「火垂るの墓」のビデオを小休止を兼ねて30分程度鑑賞。そして次の目的地が二人の生活の場、ニテコ池である。

この風変わりな池の名前は、昔、西宮神社の練塀を造るにあたって土砂を採取した際に、その土を「ねってこい、ねってこい」と言ったことから、ネテコ＝ニテコの名称が生じたという。池畔が描かれたアニメの一カットをパネルにしたものを参加者に見てもらいながら、野坂氏が描いた防空壕の場所を正岡さんが解説する。池の周辺はマンションが建設中であつたりと、60年前とは似ても似つかぬ光景となっていたが、池はアニメに描かれたそのままに近い姿を現在に残している。

最後の目的地である大社小学校へ向かう途中に、灌漑用池としてニテコ池を利用していた周りより少し窪んだ場所に立地する集落—今は完全に住宅街だが—一を通る。かつて野坂少年が身を寄せた親戚の家があった集落である。この場所は、清太と節子が空襲で焼け出されたあとに身を寄せた“お婆さん”宅や二人がお風呂をもらいにいった家の周辺として描か

れている。アニメに描かれていた周りに広がる田んぼ、ホテルが飛び交う光景とは大きく異なっているように見えるが、ここでも正岡さんがアニメのイラストパネルを掲げ説明を始めた。パネルの解説を受けながら周囲の地形を見渡してみると、描かれている場所が、立っている場所と同じことに気づく。われわれの横を流れる水路はコンクリートで整備はされているが、当時からのものであろう。参加者の方々も14歳の野坂少年が見た往事の情景をわずかながらにも感じる事ができたのではないだろうか。このようなことを考えつつ歩を進めていくと、最後の目的地、大社小学校に到着した。大社小学校は、米軍機からの銃撃を受けた鉄扉をモニュメントとして残しており、弾痕が生々しく残っている鉄扉を正岡さんの解説を交えながら見る事ができた。夏休み中にもかかわらず同校のご厚意により、甲陽園・苦楽園周辺コースには欠かせないスポットとなっている。これで予定していた約2時間の行程は終わりとなり、西田公園で解散となった。大社小学校から西田公園へ向かう途中では、埋め戻された防空壕の横を通る事ができた。ここも何気なく歩いていたら気付かずに見過ごしてしまいそうなポイントであった。

【参加者の感想・今後の課題など】

自身の体験を重ね合わせながら歩いた参加者、『火垂るの墓』の舞台が神戸・西宮であったことを初めて知った方、戦争の恐ろしさの一端をわずかながらにも理解できた子どもなど……。参加者一人一人の感じ方に違いはあるものの、例年通り非常に好評であったようである。戦争体験者・戦後生まれを問わず、次の世代に語り継いでいく必要性を感じたことがアンケートに多く記されていた。また、数回目の参加となる方、今年が初めてだったが来年からも積極的に参加したいという方が多く見られ、来年はさらにリピーターの増加が予想される。7回目のウォークも無事に終えたということで、今後は初めて参加する方とリピーターの

どちらもが一人でも多く参加できる体制を作り上げる必要がある。そのためには実行委員会やボランティアとして携わっていただけるサポーターの存在は欠くことのできない問題となってくるであろう。また、住宅街を50人を超える多人数で歩いたということもあり、参加者の方から、道路に広がらずに右側通行を徹底すべきという意見があった。周囲への気配りは当然のことであり、来年からの課題の一つでもある。

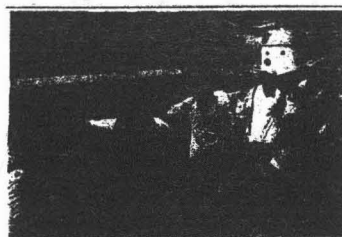
今年から新たに「子ども向け」の日を設けたということである。「火垂るの墓を歩く会」は従前から児童・生徒の参加を募ってはいたものの、内容が子ども向けではなかったという点を踏まえて、

「大人向け」「子ども向け」という分け方を試みたそう。アンケートを見る限りでは比較的好評であったといえるため、来年以降もこの方針は継続となるだろう。

最後になりましたが、8月の暑いなか熱心に耳を傾け歩いた参加者の方々、加えて今年も歴史資料ネットワークや多くの皆さんに支えられて無事に実施することができました。微力ながらウォークに関わった者として、この場を借りてお礼申し上げます。

(こんどう・こうじ)

／尼崎市立地域研究史料館)



小説の主人公大と獅子が防空壕で暮らした二ツ池で説明を聞く参加者ら（西宮市岡崎町で）

「火垂るの墓」歩く会

野坂さん小説舞台の西宮

作戦、野坂さんの小説「火垂るの墓」の舞台が神戸・西宮であったことを初めて知った方、戦争の恐ろしさの一端をわずかながらにも理解できた子どもなど……。参加者一人一人の感じ方に違いはあるものの、例年通り非常に好評であったようである。戦争体験者・戦後生まれを問わず、次の世代に語り継いでいく必要性を感じたことがアンケートに多く記されていた。また、数回目の参加となる方、今年が初めてだったが来年からも積極的に参加したいという方が多く見られ、来年はさらにリピーターの増加が予想される。7回目のウォークも無事に終えたということで、今後は初めて参加する方とリピーターの

▲2005年8月10日付『読売新聞』

(読売新聞社提供)

- ①写真で見る神戸大空襲
—戦後60年記念パネル展—
【期間】8月17日～20日
【会場】神戸市教育会館1階ロビー
【主催】神戸空襲を記録する会
【協賛】歴史資料ネットワーク、
火垂るの墓を歩く会

- ②戦後60年記念特別企画
—あれから60年—
【期間】8月20日
【会場】ラッセホール
【主催】神戸空襲を記録する会
【協賛】歴史資料ネットワーク、
火垂るの墓を歩く会

第二次世界大戦が終結して60年になります。あの激動の年に生まれた人たちが早や還暦を迎えようという、長い年月が経過しました。しかし遠い昔の出来事として忘れ去ることのできない多くの惨禍が、あの大戦中に引き起こされました。終戦まぎわの1945年、日本の多くの都市が見舞われた空襲も、その一つです。東京、大阪、そして神戸でも、多くの尊い命が失われ街は壊滅的な打撃を受けました。

(パネル展配付資料より)

「神戸空襲を記録する会」(以下、「記録する会」)のこれまでの活動経過と今回の企画要旨を「パネル展配付資料」よりまとめると次のようになる。

「記録する会」は空襲の惨禍を記録にとどめ、語り継ぐことで記憶の風化を防ぎ、改めて平和の尊さを伝えることを目的として発足した市民の活動である。これまで空襲体験者の記録文集の発行、空襲記録写真のパネル展示、空襲犠牲者の慰霊祭、空襲の痕跡をたどるウォークなどを30数年間続けてきた。近年は子どもたちに語り継ぐ活動も加えて行なって

いる。こうした活動の中で、空襲というものを現代に伝える大きな力となるもののひとつが、写真であるということ。

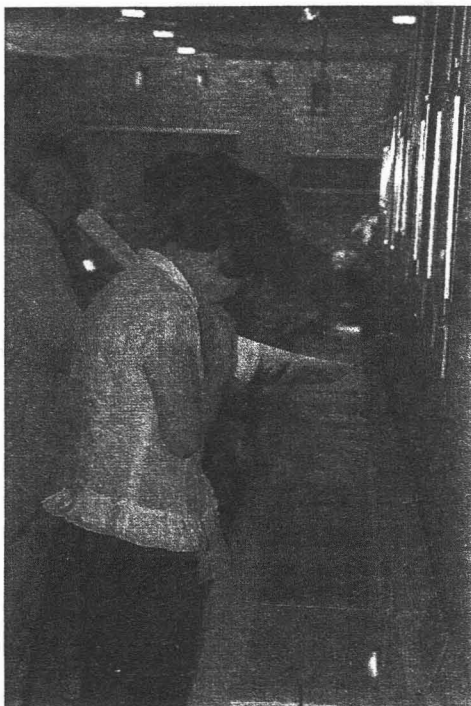
「記録する会」は強く実感してきた。活動の初期の段階に、地元の新聞社や図書館などの協力を得て写真パネルを制作し、さまざまな催しにおいて活用してきたが、パネルの老朽化も進んできたため、戦後60年を機にパネルを新調することとし、そのための募金を呼びかけたところ多くの方々が募金に協力してくださった。この新調パネルのお披露目会が今回の展示企画である。

私は昭和40年代後半に造成されたニュータウンに生まれ育った神戸市民である。言い訳がましいが、この土地は昭和22年までは有馬郡であり、戦後神戸市に編入された戦災とは縁の遠い地域だ。周りに空襲体験者は居らず、学校でも神戸空襲のことを教えてもらった印象がほとんどない(私が覚えていないだけの可能性が非常に高いが)。そんな私に、

「記録する会」の展示会を開催するにあたって、準備を手伝ってみないか、と声がかかった。自身が生活する自治体の歴史すら知らなかったことを恥じ、幾分かの申し訳ない気持ちを抱きながら準備活動に参加したのが今年の5月のことである。

上記①の「写真で見る神戸大空襲—戦後60年記念パネル展—」は、新調パネルの中から50点を選び、神戸市教育会館1階ロビーに展示した企画である。さらに加えて、仏画家の豊田和子氏がみずからの空襲体験を綴った5.8メートルもの絵巻をこの展示会に寄せていただき、4日間という短い展示期間にもかかわらず、我々の予想を超える約1200名と

いう多くの方に写真パネルを見ていただくことができた。



(▲神戸空襲パネル展の様子)

また、パネル展最終日に神戸市教育会館横のラッセホールで行なった企画が②の「戦後60年記念特別企画—あれから60年—」である。ここでは、「神戸学」という授業を取り入れている市立六甲アイランド高校で、神戸空襲を昨年調査した卒業生3名による研究発表と、経済評論家で神戸空襲体験者でもある内橋克人氏をお招きしての講演会を開催した。定員400名の大きな会場が、空襲体験者やご遺族の方をはじめとする空襲にさまざまな思いを抱く、多くの市民の方々に満席となった。

この企画の記録は、12月に、神戸空襲を記録する会編『神戸大空襲—戦後60年から明日へ—』（神戸新聞総合出版センター）と題して出版された。そのため、両企画の内容についてはこの記録集に譲ることとしたい。カラー版の「神戸

空襲戦災地図」も初収録されており、お読みいただければ幸いである。

展示の準備をするにあたって、何の知識もない状態で参加するのはいささか気まずく、慌てて神戸空襲の記録集や空襲関係の図書に目を通したなかで、原爆模擬爆弾というものが神戸に落とされていたことを初めて知った。「記録する会」の企画に関わらなければ、兵庫運河に架かる大輪田橋のこと、北野の回教寺院が空襲をかいぐって今に残っていること、毎年行なわれている薬仙寺の慰霊祭など多くの歴史を認識することもなかったかもしれない。私にとってこの経験は、地域の記憶について考え直すまたとない機会でもあった。今回のパネル展や内橋氏の講演に足を運んだ市民のなかには、このような感情を抱いた方も少なからずいたであろう。記録の滅失、記憶の風化を防ぐという「記録する会」の取り組みから、参加した方たちは平和の尊さを改めて感じ取っていただけたのではないだろうか。

この二つの企画とも歴史資料ネットワークと「火垂るの墓を歩く会」の協賛を得ることができました。募金やご協力をたまわった方々、両会場に足を運んでいただいた皆さまにこの場を借りて感謝申し上げます。

(こんどう・こうじ
／尼崎市立地域研究史料館)

＜2004 年度活動日誌＞

- (2004/06/06)2004 年度歴史資料ネットワーク
総会とシンポジウム「現代社会における歴史
学、史料・文化財保存～震災から 10 年、史
料ネットの活動をめぐって」主催
- (2004/06/12)第 21 回被災資料整理
- (2004/07/10)第 22 回被災資料整理
- (2004/07/11)第 3 回「淡河町の歴史と文化を
考える講演会」への後援
- (2004/07/28)シンポジウム地域資料の保存と
活用を考える（「シンポジウム 地域資料の
保存と活用を考える」実行委員会主催企画）
- (2004/7/8)内閣府「災害から文化遺産と地域
をまもる検討委員会」（奥村弘氏＝委員）が
「地震災害から文化遺産と地域をまもる対策
のあり方」を公表
- (2004/07/20)第 22 回運営委員会
- (2004/08/04,07)第 6 回「火垂るの墓を歩く
会」への協力
- (2004/09/01)第 23 回運営委員会
- (2004/09/05)第 1 回史料ネット市民講座「芦
屋の歴史をたどる～尼崎藩と灘目の村々～」
の開催
- (2004/09/11)第 23 回被災資料整理
- (2004/09/23)第 3 回阪神・淡路大震災資料の保
存と活用に関する研究会「災害の記録継承シ
ステムの構築を考える」シンポジウムの共
催
- (2004/09/25)「被災者支援復興会議Ⅲフォー
ラム」への参加
- (2004/10/17)「第 3 回 京都・滋賀における
歴史資料の保存活用研究会」（京都民科歴史
部会サブグループ）
- (2004/10/18)第 24 回運営委員会
- (2004/10/30)日本福祉大学知多半島総合研
究所シンポジウムへの参加
- (2004/11/08)第 25 回運営委員会
- (2004/11/13)第 24 回被災資料整理
- (2004/12/04)シンポジウム「地域資料の保存
と活用を考える」第 4 回準備研究会
- (2004/12/09)第 26 回運営委員会
- (2004/12/18)平成 16 年度史学研究所公開講
座『兵庫津研究の最前線』への後援
- (2005/01/13)第 27 回運営委員会
- (2005/01/20)国連防災世界会議「文化遺産を
災害から守るために」への参加
- (2005/01/22)文化財保存修復学会例会「文化
財防災の教訓と展望 —阪神・淡路大震災か
ら 10 年—」への参加
- (2005/01/30)第 3 回歴史文化をめぐる地域
連携協議会「市町合併と地域遺産の保存・活
用を考える—公文書・文化財・地域史料—」
への参加
- (2005/02/05)第 4 回「淡河町の歴史と文化を
考える講演会」への後援
- (2005/02/07)第 28 回運営委員会
- (2005/02/12)シンポジウム「新潟県中越地震
からの文化遺産の救出と現状」
- (2005/02/12)第 25 回被災資料整理
- (2005/03/02)第 29 回運営委員会
- (2005/03/19)第 2 回シンポジウム地域資料の
保存と活用を考える「地域資料保存・活用ネ
ットワークの構築に向けて」の共催
- (2005/04/14)第 30 回運営委員会
- (2005/04/16)大阪歴史学会見学会検討会「天下
普請を支えた石材の調達」への後援
- (2005/04/17)第 26 回被災資料整理
- (2005/05/09)第 31 回運営委員会
- (2005/05/15)日本西洋史学会第 55 回大会特別
企画「神戸歴史舞台—西洋社会との出会い、
震災と史料保存、そして未来」への後援
- (2005/05/21)大阪歴史科学協議会 5 月例会の共
催
- (2005/05/30)芦屋市立美術館シンポジウ
ムへの共催
- (2005/06/09)第 32 回運営委員会
- (2005/06/11)第 27 回被災資料整理

史料ネット NEWS LETTER No.43 2006 年 2 月 17 日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565（開室時間 平日の午後 1 時～ 5 時）

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/> e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp